

## ストレリチア・レギネの開花に関する研究

## 第2報 座止した花芽の大きさについて

\*吉村 豊・河崎佳寿夫・八反田憲生・武内和俊 (宮崎県総合農業試験場亜熱帯作物支場・\*児湯農林振興局)

Yutaka YOSHIMURA, Kazuo KAWASAKI, Norio HATTANDA and Kazutoshi TAKEUCHI :

Studies on flowering of *Strelitzia reginae* AIT.

## 2. Length of the blind buds

ストレリチア・レギネの周年栽培において、開花量が季節によって集中したり少なかったりすることは、生育の速度が夏には速く、温度・日射量の低下する冬にはきわめて遅くなることと、花芽の座止率が季節によって違うということが組み合わさって起こるものであるが、その要因の一つである花芽の座止について、発育段階の中で座止しやすい時期を知るために、座止した花芽の大きさを調査したので報告する。

## 1. 材料および方法

無加温ビニルハウスで栽培した12年生の33個体を1985年1月9日から1月18日までに順次解剖して腋芽を取り出し、座止しているものについてその長さを測定した。調査個体のシュート数は最少のものは2本、最も多いものは20本で、平均では7~8本であり、33個体の合計シュート数は244本であった。座止した花芽は色の変化と大きさによって容易に判定できたが、展開前後の腋芽は調査から除外した。

## 2. 結果および考察

調査した腋芽1,801個のうち1,221個が座止していた。第1表で大きさごとの座止数を見ると6mmから100mmまでのものが全体の95%を占めており、中でも11mmから30mmまでのものが特に多かった。

第1報で述べたように、11mmから50mmの大きさの花芽は、展開葉の内側から1番目および2番目の腋芽で花茎の鞘葉形成の終期から仏炎包形成期を経て花芽分化の初期までの段階にあたり、このステージの花芽が最も座止しやすいものと考えられる。

一方、座止した花芽で5mm以下のものは少なかった。このことは鞘葉形成の中期までは花芽の座止は起こりにくいことを意味している。また座止した花芽で101mm以上のものも少なかった。101mm以上の花芽は展開葉の内側から3番目以降の腋芽にあたり、花芽形成の段階が進むと花芽は座止しにくくなるものと考えられる。

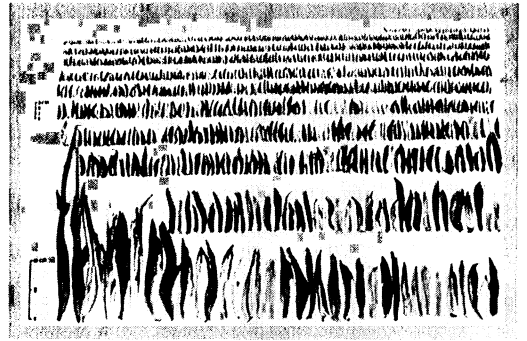


写真1 座止した花芽

ストレリチア・レギネの開花期を調節する方法として温度のコントロールによって開花を促進させたり遅延させたりしてピークをずらすことが考えられるが、経済性や開花の絶対量が花芽の座止率で決まっている点では問題がある。そこで花芽の座止をコントロールして開花期を調節する方法が考えられる。展開葉に対する腋芽の開花率は遺伝的に大きく左右され、特に優れた個体でも5~6割程度であるので、ある時期の開花をピンチによって抑えて他の時期の開花率を高めることが考えられる。ストレリチア・レギネの形態上早い時期の花芽をピンチすることは困難であるが、環境条件の制御によって最も座止しやすいステージの花芽だけを座止させることができれば開花期調節の可能性はあるものと考えられる。Halevyらの報告<sup>1)</sup>によれば長期間の高温条件や遮光処理によって年間の開花量が減っており、遮光によって花芽が座止すると考えられるので、今後は遮光処理等による開花期の調節を検討する必要がある。

## 引用文献

1) HALEVY, A. H., A. M. KOFRANEK and J. KUBOTA, *Hort Science*, 11: 584, 1976.

第1表 座止した花芽の大きさ

大 き さ mm	0 }	6 }	11 }	21 }	31 }	51 }	101 }	201 }	1,000 }	1,000 以上	合 計
座 止 数	29	147	507	249	173	79	29	8	0		1,221
割 合(%)	2.4	12.0	41.5	20.4	14.2	6.5	2.4	0.6	—		100.0